

「楽」について

「楽」を主題とするシンポジウムにおいてコメンテーターの役割を担当したので、記録の意味で会場における発言をそのまま記した上で、そのさい意中でありながら時間の関係などで触れなかったことの若干を付記することにする。

三人の報告者からさまざまに教えられたことを含めて、「楽」をめぐって非常に沢山の問題を考える局面を与えられたと思います。その中で一つだけ私から問題を提起するとしますと、「楽」という文字をめぐって日本のわれわれの日常感覚から与えられるものと、ここでのシンポジウムで与えられたものをどうつなげばいいかが関心になります。そこで出てきましたのは、一つは「安楽」という言葉であり、もう一つは「快樂」という言葉であります。この二つの言葉を並べてみることによって、ひとつ何か、仏

飯島宗享

教的な思想と西洋的な思想との対比的な考察をするためにも、示唆が得られそうな気がしたわけです。つまり、安楽という場合には、苦の除去された状態、苦からの解放、解脱、離脱という方向性を強くもつように思われます。たとえば司会者が、比較思想学会第十三回大会の掲示板を用意するにあたって、前回に用いたものを三の所を改めるだけで楽をさせてもらいました、という言い方をなさいましたが、この「楽」の語の用い方はわれわれの日常語のうちにも頻繁にある用例ですし、「楽」という言葉のもつ意味のなかでかなり大きい部分を占めるものです。この意味の「楽」はいま申しました対比のなかで安楽の方に位置づけられる楽で、苦勞がそれだけ少くてすんだ、苦勞なしですんだ、あるいは苦勞を減少させることができたというわけです。これはやはり苦というものからの離脱の方向での楽です。それに対して、快樂の方に

なりますと、これは苦から脱却するばかりでなしに、そういう快楽もありますけれども、快楽というところからかというところを作り出す、苦を媒介として却ってより大きな快楽を得るということがあり、快楽のために苦がその快楽のための不可欠の否定的な契機をなすということがあります。汗を流し骨を折り、身も心も勞して、感覚的には苦痛でありながら、しかもその結果は楽しい。また結果としてのその楽しさを求めて、あえて苦を招くことにもなる。この場合の楽しさに、快というもの、また快感の実態があるように思われます。

このような快という捉え方で理解される楽と、安らぎや安らぎに傾斜をもつ安楽という形で捉えられる楽とは、かなり対照的に位置づけられてよいと思います。この対照性で考えますと、荒っぽい言い方は非常に危険ではあると思えますけれども、東洋的な考え方のなかに比較的この離脱、苦からの離脱という形での安楽に通ずる楽の考え方が窺われてよいのか、あるいは西洋の場合に快の方に重点をおいた快楽的な楽の理解が強いのか、こんなふうに思いたくなるのをそう思っているのか、その辺のことを考えてみたいと思います。

小山宙丸さんの御報告のなかに、レジュメでは「楽」の問題を考えるのにギリシャの「ヘドネー」という語を出されて、しかしこの場ではそれを補う形で同じギリシャ語の「カタルシス」ということに触れたお話がありました。もしかしたら、ヘドネーより

はカタルシスの方が安楽の方に、少くとも解放性に、積極的に形成的に獲得する形で楽ではなしに、免れ逃れるという方向での楽を享受することにかかわるのではないかと思われます。カタルシスは、外からのものではなくみずからの身の内の好ましくないものから、害をなし不快感を与え支障をなすものから、刺戟は外部から来るにしても自分の内部に蓄積され鬱積し鬱屈する好ましくないものから、解放され浄化されて安らぎに達する面を強くもつ言葉と解されるところからそう思われるわけです。たまたま御報告のなかでカタルシスということが出て来ましたので、言われてみるとこのカタルシスが安楽の楽に近いものになるのではあるまいかと、私の構図のなかに位置づけてみたくなる次第です。また、これに関連して遊びの問題にまで触れたお話がありました。スポーツの問題も例に出されました。遊びやスポーツに関して、さまざまな芸術的制作や学問的研究に関しても、考えてみると、これらはいずれも疲労をよびおこし苦痛を伴いつつ、むしろそれらがあることによって却って快楽が得られるという面があります。こうして快楽の楽と安楽の楽との対比のなかで苦を中点において考えることをしてみると、角田忠信さんが御教示くださったことと、すなわち人間の身体において快感を意識させる部位が脳の視床下部の或る場所、他の動物の場合よりもやや上方で、心的要因の関係から皮質部にもかわりながら見られるようだとおっしゃるときに、その快感というのはこの対比的な楽との関係において

はどう理解されればよいのかという問いが生じます。それは直接的な、身体にとって直接的な快感をひとまず指すものと解されますが、身体的にはむしろ苦であるにもかかわらずその苦を越えて得られる快感の方はそこに含まれるのかどうかという点です。想像力だとか思考だとか、あるいは信仰だとか、こういうものを通じて得られた快感や楽の境地も、やはり身体に還元されて生理的な場所に反映してくるのかどうか。それらの関係などが生理学的に、あるいは生物学的な現象としてどれだけの実証性をもってわれわれに心身の相関関係を肯定的に考える材料を提供してくれるのか、きわめて興味のあるところです。これらについてお教えいただければ幸いです。

「楽」には「善美なるもの」を感得享受する「生の充足感」があり、その限りで「楽」は生にとって願望されるものである。従って「楽」は、恍惚・陶醉・満足・法悦に通ずる矛盾の止揚、主客合一を本領とする。そこには、すでに苦がないと共に楽もない。苦として厭われるものがないと共に楽として願われるものもない。それは西方の哲学で人間の「自由」として願望され問われてきたものと本領を一にするもののように思われる。

その本領のもとで、さしあたり「楽」は「苦」の反対概念として対立領域で理解される。そのとき「楽」は諸楽に区別される。それらはすべて「苦」からの解放、「苦」の除去ないし克服であ

る点で共通性をもっている。いずれも「苦」の対概念だからである。それらの「楽」の区別は、立場と関心と事柄に依じてさまざまでありうるし、それぞれの間で「楽」の度合・内容・質に関して価値序列がつけられもする。そして価値の問題が加わると、「楽」に関しても価値の分裂と闘争の事態が考察を迫ることになる。つまり、同一状態が或る人にとっては楽として感受され別の人には苦として感受されるという事態、また同一人においても時と場合によっては逆になるという事態があるからである。そこには、楽音と噪音の関係、支配者の楽と被支配者の苦の関係、さらにはサディズムやマゾヒズムの関係などが考えられるべき場があり、各人の個性差の問題と社会関係をふくむ状況の問題とが、「楽」の考察において不可避的となる。「楽」は個体における「体の楽」から「心の楽」、さらには「社会関係における楽」にまで及んで関係を重層化させる。体の「楽」を通じて心の「楽」を求めたり、身を擲つ献身で人や事に殉ずる「楽」があったりするし、後者の場合は最初に記した「楽の本領」として「自由」と別の物ではなく、「遊び」にも通ずるものであろう。

右のことを念頭におきつつ「楽」についてのさまざまな区別図式を考えると、ここでは「消極性と積極性」「受動性と能動性」、そして能動性においては「対象に向うものと主体に向うもの」との三項で考えてみたくなる。それぞれの内部での仔細な区別を省けば、消極性としての楽とは、「楽しい」という実感は皆無か稀

少で、少くとも「苦でない」という自覚が顕著な感受状態であつて、日常的に「体(氣)を楽になさい」などと言うときの、緊張をほぐしてくつろぎ、窮屈でも苦痛でもない安らぎの状態、あるいは「これは楽に出来る」と言うときの容易さがこれで、一般に「楽」と言われる語の用法にこれが見られる。「楽座・楽市」などにおける、特権や規則の規制から解放されて自由な商取引が保障された自由市を示す場合の「楽」も、ここに位置づけられてよいだろう。これに対して積極性としての楽とは、「苦でない」という積極性においてはではなく「楽しい」という積極性において感受される楽である。この楽は、しかし、楽しいという感性的言辭が示すとおり、實在的であれ想像的であれ想起的であれ、いずれにしても現前している成果・状態に対して主観がそれを受けとる感受の仕方の一つであつて受動性のものである。そこで「楽しい」の受動性に対して「楽しむ」の能動性を置いてみたい。苦の状態においてその感受は「苦しい」であつて「楽しい」ではないが、「楽しむ」能動性には苦の状態を楽しむことも可能である。しかもその場合、この能動性は、苦の状態をそれとしてそのまま楽しむことも勿論可能であり、それは前記の「楽の本領」にかかわることでもあるが、そればかりでなく、表裏の關係で苦の克服と楽の創出をおこなう能動性でもある。苦の克服と楽の創出にあつては、苦と感受される状態・対象を更改して楽と感受される状態に移して、そこに楽の状態を創出する方向で作用がなされる能動

性と、逆に苦と感受する主体の側に変革を求め、主体の自己変革によつて楽を実現する方向をとる能動がある。さらにまた、そうした能動的な作用によつて生じた結果や状態を「楽しい」とする「楽」のほかに、楽として望まれる結果や状態の実現をめざして主体が能動的に努めている作用過程そのものを、「楽しい」と感受する「楽」が、むしろ実存的に立てられることができよう。「楽」の字が「ゲフ・ぎよう」と読まれて、たとへば『教行信証』における「信楽(しんぎよう)」のごとく信じて願うことの直下にある楽しみを意味すると解されるとき、よきものとして「願う・好む」の意の動詞としての「楽」は、「楽」を求めての切なる作用自体のうちにある「楽」を含蓄して用いられているように思われる。(一九八六・八・一〇)

(いじま・むねたか、現代西洋哲学、東洋大学教授)